様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22　年　3　月　31　日現在

研究種目：基盤研究費(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19520344
研究課題名（和文）　アラン谷の言語と言語政策に関する記述的研究

研究課題名（英文）　Descriptive research on the language and language policy of the Aran Valley

研究代表者
長谷川 信弥（HASEGAWA SHINYA）
大阪大学大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：20228448

研究成果の概要（和文）：本研究は、スペイン、カタルーニャ自治州アラン谷における、オック語ガスコーニュ方言の下位方言アラン語およびその言語政策を記述することが目的である。初年度は正書法、音声に関する記述を開始し、また、自治州政府の首長および言語政策局等関係部局担当者への面接を実施し、言語政策の運用状況を調査した。2 年目、3 年目には、初等中等教育機関での言語政策の運用状況を面接調査し、日本語初の文法書刊行を目指し、形態的、統語的記述を開始した。

研究成果の概要（英文）：This reseach has its aim at describing the language an its language policy of the Aran Valley, Catalonia Autonomy of Spain。 In the Aran Valley, the Aranese, a dialect variation de Gascon, is spoken traditionally and it obtained its official status through the Constitution of Catalonia issued in 1987。 In the first year we started the research by decribing the phonetic and orthographic details of this language。 Meanwhile we had many chance to have interviews with its local government officials including its president to know the language policy。 In the second and third years we had more occasions to hold interviews with teachers of educational institutions and elementary schools in order to know how the language policy actually works。 And also we began a grammatical description ot the Aranese and we continue to redact its first grammar in Japanese。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：アラン谷，アラン語，オック語アラン方言，言語政策，カタルーニャ自治州，オック語

１．研究開始当初の背景

オック語アラン方言(アラン語)は、スペインに話者のいる唯一のオック語のひとつであり、カタルーニャ自治州リェイダ県アラン谷に固有の言語として存在する。アラン谷は、ひとつの行政単位として存在するが、同地域の位置するカタルーニャ自治州では、1978年に制定された自治州憲章を受けて、1983年に言語正常化法が制定されたが、そこではこのアラン谷での言語に関する規定が盛り込まれ、この地域内での公用語としての地位が確立されたと考えられる。さらに、1990年に地域内の特別自治権を保障する「アラン谷特別体制法」が施行され、名実ともに自治が認められた。その後、言語正常化法の改訂版となる、1998年の言語政策法においても、同言語の地位は同じく保障されている。この間、学校教育に関しては、従来からのスペインとしての教育がおこなわれてきたのみで、言語の教育に関する整備は遅れ、さらには20世紀後半のマスメディアの発達によってスペイン語の強い影響下におかれた同地域では、アラン語の母語話者が漸減し続けてきた。しかし、21世紀に入り、法的整備に追いつく形で、自治州政府に言語政策局が設けられ、また各教育機関においてもアラン語、カタルーニャ語、スペイン語での教育が軌道に乗った．さらには、同地域の急速な観光開発によって、スペイン国内だけでなく隣国フランスをはじめ、ヨーロッパ全体との交通網の整備が整い、多くの国からの観光客が同谷を訪れるようになった。このような観光資源の開発に呼応して、学校教育においても上記の3言語に加えて、フランス語と英語を教育言語とする授業が近年開始された。これにより、計5言語を教育言語とする初等・中等教育の実践は、EU内では他に例がなく(EU外であるスイスには存在する)、各国から注目されており、その現状を調査、記述することは言語政策上の観点からも興味深いことである。

このように、20世紀末になってようやく公用語としての地位を域内のみで獲得した。さらに、2006年にはカタルーニャ自治州憲章の改訂により、カタルーニャ自治州全体で公用語として法的な地位を確立している。上記のように、カタルーニャ自治州は言語政策上、各国から注目されている地域で、スペインの国家語であるスペイン語と自治州固有の言語であるカタルーニャ語が併用され、その法的な地位も確立されてきた。しかし、2006年改訂の自治州憲章において、自治州３番目の公用語として、オック語の一方言であるアラン語が公用語として認められたことは、日本ではまったく認知されていないことが、本研究開始当初の背景としてあげられる。

また、言語の記述も遅れており、暫定的ながら正書法が制定されたのが1981年であり、その整備が遅れていることは明らかである。形態統語上の記述は、1930年前後におこなわれたものが最新のものであったため、それ以降の変化にたいする研究はまったくといっていいほどおこなわれてこなかった。そして、21世紀に入り、リェイダ大学において、ようやく研究体制が整いはじめ、現在では同言語を教育する専任教員がひとり配置されている。しかし、同言語の記述作業は、ようやく始まったばかりであると言わざるをえず、そのため、同言語の言語政策および文法的な網羅的記述研究が必要とされている。

２．研究の目的

従来、日本では紹介されてこなかったオック語アラン方言についての文法記述、および言語政策に関する情報を紹介する。この際、多言語状況にある同地域の現状を網羅的に調査、記述し、これと同時に、同言語の正書法、形態統語上の諸問題に関する記述的研究を整理し、同言語の文法書を記述することにより、日本における同言語に関する情報を周知させることを目的とした。

３．研究の方法

同言語に関する学術的記述は、資料としてはカタルーニャ自治州のバルセロナ、リエイダにある各大学への訪問により収集し、同言語による資料および図書は、これらが唯一流通しているアラン谷に出向き収集する。また、言語政策に関する調査も同地域に出向き、自治州政府関係部局担当者および教育機関での教務担当者および教員への面接調査をおこなった。具体的には、2009年度はアラン谷自治政府言語政策担当者に対する聞き取り調査を５回おこない、さらに、アラン谷内初等教育機関の教員に対する聞き取り調査を20回以上、初等中等教育校への授業見学をのべ5日間にわたっておこなった。

４．研究成果

2007年度は、２回の打ち合わせを実施し、音声・音韻面の記述を開始し、さらに現地調査をおこなうこととなっていた。まず、2回の打ち合わせ(2007年9月29日および2008年2月15日)では、2008年3月の現地調査時の現地研究者との連絡分担、訪問機関の選択に関する調整をおこない、また調査の内容についての詳細な検討をおこなった。それらをふまえ2008年3月の調査では、アラン谷の位置するカタルーニャ州リェイダ県県庁所在地にあり、この言語の研究にあたるリェイダ大学に２名の研究者(Jordi Suïls, Aitor Carrera)を訪問し、ついでアラン谷での調査をおこなった。具体的には、まずリェイダ大学の研究者には、上記で述べた記述の際に生じた多くの疑問点を質問項目として提示し、また実際の音声面での記述を確認する作業を詳細に

おこない、従来から記述されてきた音声上の項目に関する疑問点を討議した。これらから判明したことは、従来からの音声記述の不正確さが明らかになり、これは現地研究者もはじめて気づいた点であることが確認された。また、アラン谷での調査では、現地の初等教育機関(小学校)および中等教育機関(中学校、高等学校)において、教務担当者に学校全体のカリキュラムなどについての状況を調査すべく面接をおこなった。同校では、5言語を教育言語として用いる授業をおこなっており、担当可能な教員の授業配置の調整が複雑で、これを統括する教務担当者の役割が重要であり、多言語教育の現状の全体像を把握するには同担当者への面接が有効であった。また、アラン語の授業およびアラン語による授業も見学した。その際に担当した教員数名にも面接し、現在の教育状況について説明を受けた。次いで、自治機関(アラン谷自治政府)を訪問し、この政府代表者(自治州首長)と面会し、今後の現地調査時の母語話者の紹介等に関する自治政府の協力を要請し同意を得た。さらに、同機関の言語政策担当者および言語事務担当官とも面会し、政策上の問題点などについて詳細な状況説明を受けた。これらの調査内容については、内容を整理したうえで、2009年3月28日に研究分担者が、研究発表をおこなった。また、この2008年3月の調査では、アラン谷自治政府において、また、バルセロナ大学およびカタルーニャ自治政府統計局で、定期的におこなわれている言語調査に関する資料収集をおこなった。

2008年は、同年5月に研究代表者が、正書法上の記述に関する問題点の考察を「オック語アラン方言(アラン語)の記述に関する問題点の考察」として、関西スペイン語学研究会例会において、2008年5月31日に報告し、2009年3月発行の雑誌にこの報告に基づき、さらに形態上の問題をも考察し、加筆した論文を刊行した。この研究では、従来から問題となっている本言語の正書法上の問題点を整理し検討した論文は本邦初であり、同言語の研究にとって嚆矢となるものである。また、研究分担者も2009年3月に現地調査の結果をふまえ、自治州全体の公用語となったオック語の政策上の問題点と現地での反応を考察する研究発表をおこなった。

さらに、2008年は上記の海外研究者との連絡も引き続きおこない、現地調査の際に面会した。現地調査では、オック語を巡る社会言語学的状況の変化、すなわち一地方の公用語から自治州全体のそれへの変更(2006年)によって生ずる行政側の対応策を探るべくいくつかのスペイン側の行政機関を訪問、そして、本来の言語地域であるフランス側の反応を見るために南仏地域の教育機関および地域振興センターをも訪問し、フランス側の対応を確認した。また、これと同時にアラン谷においても資料収集もおこなった。

また、2008 年は前年度におこなった、アラン語の音声および音韻の記述に加え、形態統語論に関する記述をおこない、以下に述べるように、2009 年度には統語的記述を開始した。その際に疑問の生じたいくつかの点は、現地調査の際に面会した現地研究者と議論し、回答を得た。

2009年度は、前年度末に現地（初等・中等教育学校）でおこなった調査（聞き取り調査および資料収集）に基づき、研究分担者がその研究報告を「アラン谷における言語教育-多言語話者産出の場としての学校」として、関西スペイン語学研究会320回例会において、2009年4月12日に発表した。そこでは、この調査により現地の教育機関における言語教育の現状があきらかにできたと考えている。すなわち、多言語の状況が生まれやすい欧州のなかにおいても、スペイン・フランス両国の境界地域に位置するアラン谷のより特異な状況が、観光資源の開発とともに、さらにより複雑な言語環境の様相を呈していることが報告できたと考えている。また、研究分担者はカタルーニャ自治州全体の司法通訳制度構築における同地域の現状を自治州全体の状況とも比較する報告を学会においておこなった。

さらに、2009 年度は 2 回の打ち合わせをおこない、また、海外研究者との連絡も引き続きおこない、あらたな研究者を紹介(Jèp de Montoya)され、現地調査の際に面会した。その際、研究代表者が前年度に開始した形態・統語的記述に関して生じたいくつか疑問点などを質問し、討議した。これによって、同言語の通時的変遷に関する一連のこの記述に関しては、前年度に入手したオック語ガスコーニュ方言の正書法及び形態・統語上の規範文法書との記述の相違点を詳細に吟味し、面会の際に明らかになった正書法制定時の経緯などの記述も含めた総合的な記述を引き続きおこなった。このように同地域の言語と言語政策に関する記述が今年度もよりいっそう具体的に遂行できたと考えている。

また、2009 年度の現地調査では、アラン谷自治政府言語政策担当者に対する聞き取り調査を 5 回おこない、さらに、アラン谷内初等教育機関の教員に対する聞き取り調査を 20 回以上、初等中等教育校への授業見学をのべ5日間にわたって行った。

このように、2008 年、2009 年ともに計 20 回以上行政機関および教育機関において言語政策および教育関係者に対する聞き取り調査をおこない、その結果を研究会等で発表している。また今後もそ

れらの結果を雑誌等で発表していくことになっている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 2 件）
①塚原信行「スペイン・カタルーニャ自治州における司法通訳制度に関する研究」Hispánica, 第 53 号、127-149 ページ、2009 年、査読あり。
②長谷川信弥「オック語アラン方言(アラン語)の記述に関する問題点の考察(1)」Estudios Hispánicos, 第 33 号, 5-12 ページ、2008 年、査読なし。

〔学会発表〕（計 4 件）
①塚原信行「司法通訳制度構築および運用に関する一考察 - スペイン・カタルーニャ自治州における事例から」法と言語学会第 1 回年次大会、2009 年 12 月 12 日、金城学院大学。
②塚原信行「アラン谷における言語教育-多言語話者産出の場としての学校」関西スペイン語学研究会 320 回例会、2009 年 4 月 12 日、大阪産業大学梅田サテライトキャンパス。
③塚原信行「カタルーニャ自治州におけるオック語正常化を巡る動きー汎オック語は構築されうるかー」「社会言語学」刊行会研究集会、2009 年 3 月 28 日、愛知県女性総合センターウィル愛知。
④長谷川信弥「オック語アラン方言(アラン語)の記述に関する問題点の考察」関西スペイン語学研究会例会、2008 年 5 月 31 日、大阪産業大学梅田サテライトキャンパス。

６．研究組織
(1)研究代表者
長谷川 信弥（HASEGAWA SHINYA）
大阪大学大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：20228448

(2)研究分担者
塚原 信行　（TSUKAHARA NOBUYUKI）
愛知県立大学外国語学部非常勤講師
研究者番号：20405153